淑徳短期大学研究紀要第52号（2013.2）

日本型プレイセンターに対する センター代表者と参加家庭による活動評価

佐　藤　純　子

（2012年８月13日受理）

要　約

本調査は、親による協働保育活動であるニュージーランドのプレイセンターをモデルとして2002年より活動が始まった日本のプレイセンター活動に対する評価を、そこに通う参加者とセンター代表者を対象に質問紙によって実施した。参加する親たちは、プレイセンターの活動を通じて、子育ての仲間を増やし、学びあう経験を通じて、助け合いの精神や子どもに対する理解と知識を獲得していることがわかった。しかしながら、わが国では、プレイセンターが全国で10数か所と活動の場が少ないため、プレイセンターの活動が未だ一般には周知されておらず、参加を始めたばかりの親たちに活動の理念が理解されづらい現状があることが明らかとなった。今後はさらなるプレイセンターの普及活動や広報活動が求められるとともに、「親が成長する」ことを可能にするプレイセンターの価値を現在活動中の親を通じて世論に広げていく必要があることが示唆された。

キーワード　プレイセンター、子育て支援、親の協働、自主保育

はじめに

１．調査研究の趣旨

わが国では、1994年のエンゼルプランを皮切りに少子化対策の一事業として多様な子育て支援の取り組みが進んだ。しかしながら、依然として、子育て支援の諸策においては、保護者が子育て支援におけるサービスの受け手であるとして捉えられることが多く、プレイセンター活動に見られるような親たちが主体となる活動の普及が難しくなっている。

近年では、親たちによるプレイセンターの協働活動の継続が、地域コミュニティや参加家庭にとって有益な資源となるソーシャルキャピタルを創出していることが実証されている。[1)2)3)]　また、育児ネットワークにおいては、地域成員同士のネットワークの強化が子育て環境の改善につながっていることが示されている。[4)]

本稿では、これまでのわが国の子育て支援の動向を踏まえ、日本プレイセンター協会の協力のもと、子育ての当事者となる親たちが地域コミュニティのなかで、育児ネットワークとしての相互扶助組織を形成することができるのか、つまりプレイセンター型の子育て法がニュージーランドと同様にして日本においても広がっていく可能性があるのかを分析することにした。そのため、ここでの調査では、プレイセンターにおける活動状況、参加者の属性や活動に対する目的や意欲、運営面における懸念事項などを解明する「プレイセンター活動に関するアンケート調査」を実施している。さらに、調査は、各プレイセンターの全体像と参加者それぞれの実情を明らかにするため、センター代表者と参加家庭との２種類の質問紙を用意し実施に至っている。

２．調査の方法

調査対象は、日本でプレイセンター活動を行う11団体に依頼した。[5)] 参加家庭に対する調査は、対象となるプレイセンターに参加する234家庭となっている。調査実施期間は、2011年６月11日～８月31日までとし、日本プレイセンター協会主催のシンポジウム（2011年６月11日､淑徳短期大学にて実施）にて質問紙を配布した。不参加のプレイセンターには、質問紙の必要部数をセンター代表宛に郵送した。

有効回収数は、プレイセンター代表者に対するアンケート調査10団体（有効回答率90％）、参加家庭に対するアンケート調査108世帯（有効回答率46％）であった。

なお、アンケート調査に用いた質問紙は、ニュージーランドで行われたプレイセンターに対する全国調査の質問項目を参考にして作成した。[5)]

３．結果と考察

調査の分析は、①各プレイセンターの代表者、②参加家庭との２つの調査対象群に分類し行っている。以下、最初にプレイセンター代表者の回答結果、次に参加家庭の回答結果を示すこととする。

①　プレイセンター代表者への調査結果

３．１　プレイセンターの設立年数について

設立年数は､「３年～４年未満」と「４年以上」が同率で各30.0％、合わせて６割（60.0％）を占めている。以下は、同じく同率で「１年未満」(20.0％)､「１年～２年未満」(20.0％）と続いている。また､「２年～３年未満」は０人である。

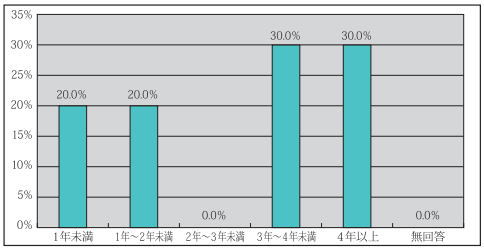

図１　プレイセンターの設立年数

3．2　プレイセンターの登録家庭数について

登録家庭数を見ると、「11～20」が６割（60.0％）を占めている。２位以下には、「10未満」（20.0％）、「21～30」（10.0％）、「40以上」（10.0％）と続いている。また、「31～40」は０人である。

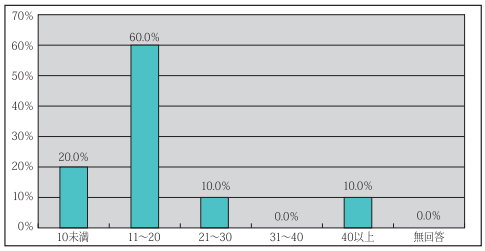

図２　各プレイセンターの登録家庭数

3．3　プレイセンターの活動場所について

活動場所を見ると、「公民館」（30.0％）についてだけ複数回答（３件）があった。それ以外は同率（10.0％）で、「弘前市清水交流センター」、「小栗山農村交流公園」、「子育て支援センター」、「もくぷれ」、「ごごプレ」、「杉並区立成田児童館」、「川埼市民ミュージアム」、「中原市民館」、「代表者の自宅」、「北九州市立大学」、「野中神明宮共益公会堂」となっている。

3．4　プレイセンターの活動頻度について

活動頻度は、「週１～２回」（40.0％）が最も多い。続いて、「週１回以下」（20.0％）、「週２～３回」（20.0％）、「週３～４回」（10.0％）、「週５回以上」（10.0％）となっている。

表１　プレイセンターの活動頻度

	回答数	%
週１回未満	2	20.0%
週1～2回	4	40.0%
週2～3回	2	20.0%
週3～4回	1	10.0%
週5回以上	1	10.0%
無回答	0	0.0%
計	10	100.0%

※1ヵ月を4週として計算

3．5　スーパーバイザーの人数

スーパーバイザー数は、「１人」（40.0％）が最も多い。２位は、「３人」（20.0％）。続いて同率で「０人」（10.0％）、「２人」（10.0％）、「４人」（10.0％）、「５人以上」（10.0％）となっている。

表２　スーパーバイザー数

	回答数	%
0人	1	10.0%
1人	4	40.0%
2人	1	10.0%
3人	2	20.0%
4人	1	10.0%
5人以上	1	10.0%
無回答	0	0.0%
計	10	100.0%

3．6　参加する子どもの年齢

０歳児は、「２人」（33.3％）が最も多い。以下は、「１人」（22.2％）、「４人」（22.2％）が同率、「３人」（11.1％）、「５人以上」（11.1％）が同率となっている。また、「０人」は０である。

表３　０歳児

	回答数	%
0人	0	0.0%
1人	2	22.2%
2人	3	33.3%
3人	1	11.1%
4人	2	22.2%
5人以上	1	11.1%
計	9	100.0%
無回答	1	

１歳児は、「５人以上」（33.3％）が最も多い。続いて、「１人」（22.2％）、以下は「０人」、「２人」、「３人」、「４人」が同率（11.1％）となっている。

表４　１歳児

	回答数	%
0人	1	11.1%
1人	2	22.2%
2人	1	11.1%
3人	1	11.1%
4人	1	11.1%
5人以上	3	33.3%
計	9	100.0%
無回答	1	

２歳児は、「５人以上」（44.4％）が最も多く４割以上を占めている。続いて「４人」（22.2％）、以下は「１人」、「２人」、「３人」が同率（11.1％）となっている。また、「０人」は０である。

表５　２歳児

	回答数	%
0人	0	0.0%
1人	1	11.1%
2人	1	11.1%
3人	1	11.1%
4人	2	22.2%
5人以上	4	44.4%
計	9	100.0%
無回答	1	

３歳児は、「２人」と「５人以上」が同率（33.3％）で最も多く合わせて６割以上を占めている。以下は「０人」、「３人」、「４人」が同率（11.1％）となっている。また、「１人」は０である。

表６　３歳児

	回答数	%
0人	1	11.1%
1人	0	0.0%
2人	3	33.3%
3人	1	11.1%
4人	1	11.1%
5人以上	3	33.3%
計	9	100.0%
無回答	1	

４歳児は、「０人」（55.6％）が最も多く半数以上を占めている。以下は「１人」、「２人」、「３人」、「４人」が同率（11.1％）となっている。また、「５人以上」は０である。

表７　４歳児

	回答数	%
0人	5	55.6%
1人	1	11.1%
2人	1	11.1%
3人	1	11.1%
4人	1	11.1%
5人以上	0	0.0%
計	9	100.0%
無回答	1	

５歳児は、「０人」（88.9％）が最も多く９割近くを占めている。続いて、「５人」（11.1％）である。また、「１人」、「２人」、「３人」、「４人」は０である。

表８　５歳児

	回答数	%
0人	8	88.9%
1人	0	0.0%
2人	0	0.0%
3人	0	0.0%
4人	0	0.0%
5人以上	1	11.1%
計	9	100.0%
無回答	1	

自由記述①　―　あなたのプレイセンターで課題となっていることはどんなことですか。（抜粋）	
1	「プレイセンター」というものがあまり理解されていない中で、公設ということで門戸を広く開放しているので、登録した会員にプレイセンターの理念などを理解してもらうことの難しさを感じています。
2	・23年４月に幼稚園入園の為、８名が抜けたため、参加する子どもが減ってしまったこと。・競合する子育て支援のサービスが多く、見学者は多いが、なかなか定着しないこと。・参加者に「当事者意識」をなかなか持ってもらえないこと。
3	・回数が少ない。　・場所の確保。・スーパーバイザーの仕事（本業）との関係。 ・学習会について。色々やってみましたが、定着が難しかった。 ・学習会の際に、子どもをしっかりと預けられる場を考える必要あり。
4	・新メンバーとコミュニケーション　・連絡ツール ・子どもの遊びの幅を広げてあげたい。
5	０才～３才迄の利用（自宅なので、これ以上大きい子には活動の場としては無理な為）しかし、夏休みや祭日は、幼稚園児、小学生も来る。→この子達には小さい子に折り紙を教えてもらうなど工夫しているが、玩具等は対象年齢の幅を広げて準備する必要が生じている。
6	①まず、外遊びができないのが弱点。活動回数が少ない（公民館利用のため回数制限がある）ため、会員同士の関係がなかなか密になりにくい。→自主運営のムードが高まりにくく、やや“お客さん”になってしまう。 ②一方で、スーパーバイザーの私たちも、学校や地域で役割があり、または仕事を持ち始めたり、親が気になったりと自分自身のことも手がいっぱいの世代。プレイセンターの活動は続けるだけで精一杯で、発展させていく所までいかない。
7	９月から入会してくる人達をうまく迎え入れていくこと。助成金の規則の縛りがあるので、その範囲内で動かないといけない。 活動場所も２ヶ所なので、両方へ来れる人に来てもらいたいが……。

8	ランチ後の時間も入れたらたっぷり４時間ありますが、午前の遊びの時間が２時間しかとれないこと。
9	場所の問題。プレイセンターらしいダイナミックな遊びが思うようにできない（汚損破損など）。おもちゃの保管、運搬（重い物、大きい物、本などは持って行けない）。スーパーバイザーが一人なので負担が大きい。一人一人のエマージェント・リーダーシップがまだ発揮されていない。スーパーバイザーの質、力量不足。親のエンパワーメントをどう引き出すか？ 遊びの意味、観察を学んでいる途中。学び合いの時の保育サポーター料の確保。セッション、学び合いの日時の設定、調整。平日しか参加できない人、午後や土日の方がよいという人がいる。働いている親の参加をどう促すか。

自由記述② ― 参加している親子の様子を教えてください。（抜粋）	
1	・とても丁寧に子育てをしている母親達だと思う。時に真面目すぎて、プレイセンターを重荷に感じ、やめてしまった人もいる。 ・発達を心配し、周囲からのプレッシャーに悩む母親が、プレイセンターで子どものありのままを認め、「そのままでＯＫなんだ」と感じる様子を見ると嬉しく思う。
2	何事にも積極的、協力的、よい子育てをしたいと考えている母親が多い→仲が良い（親も子も）→信頼し合っている→協力（子を預かり合うなど）をし合っている。
3	今いる人達は去年からいる人達なので、主体的に活動へ関わってくれており、いい感じ。保育室に預けられている子たちの中でもプレイセンターのお子さんは遊びを自由に工夫していて楽しそう。（保育ボランティアさん談）
4	最初の頃は気を使った言葉が多かった。遠慮気味な控えめな発言だった。笑顔が増えた。リラックスして参加している。積極的になってきた。「○○ならできます」という言葉が出てきた。定期的に集まりたいとの声が出てきた。口コミで仲間が増えている。子どもたちも場所や人に慣れてきた。安心して遊んでいる。親から離れて遊べるようになってきた。片付けなども積極的に参加している、親も子も。
5	場所や周囲の人に慣れてくると、他の子と話したり遊んだりして「皆の子どもを皆で育てよう！」とする関わりが多く見られる。子どもを認め合い、大人同士も尊重し合い、親子共に繋がり方がうまくなっていくように見られる。
6	新規メンバーは（お子さんも）徐々に慣れてきて、活動に積極的に関わろうという姿勢が見えてきた。前からのメンバーは新しい事にチャンレンジしようとする方が多く、前向きな集まりになっていると思う。子ども達同士の関わりは月齢により違うが、上の年齢になると一緒に遊べるようになってきた。
7	人により様々ですが、肩から力が抜けて子どもの気持ちを尊重するようになります。それによって一時的に子どもがワガママを言えるようになることもあるが、そこを越えると親子共に顔つきがイキイキして楽しそうになります。また自分の子以外の子が可愛く思えるという事を多く聞きます。
8	先輩ママに色々聞いて、安心したり、子どもも他の子の遊びをじーっと見ています。発する言葉も沢山の大人に話を聞いてもらって嬉しそうです。外遊びでは走るのがそれほど好きでない子も触発されて走り出します。すごく人見知りだった子がプレイセンターで色々な人に慣れ、地域のコミュニティセンターでも、「人を怖がらなくなった」と聞くと嬉しいです。人が集まって遊ぶってすごいことですよね。大人は他の子に関わることで優しい気持ちになっているような気がします。

6

自由記述③ ― 日本プレイセンター協会に要望やご提案があれば教えてください。（抜粋）	
1	・専業主婦を対象とした支援策は国策とギャップがあり、「待機児童ゼロ」と「子育てする権利」の間にある河は深い。ワークライフバランスを訴え、汐見先生を味方につけ、０～３歳に絞って「居場所」としてのプレイセンターをアピールして存在感を示してはどうでしょう。 ・協会のパンフレットをホームページでダウンロードできるようにしてほしい。
2	①プレイセンター（セッション）の活動内容を日本の現在に合わせていくための研究開発を行ってほしい。 ②又それを母親達に具体的に伝えていく方策も考えてほしい。 ③子どもの発達・発育に関する様々な研究や知見をプレイセンターの活動にどのように適応していくことができるのかを示してほしい。
3	いつでも相談や質問に答えて（応えて）くれる窓口があればいいと思います。各地のプレイセンター、ニュージーランドのプレイセンターの様子、情報ももっと欲しいです。プレイドゥ通信（機関紙）がなくなって、メーリングリストへの参加もしてないので（方法がよく分かりません）、プレイセンターが推奨するおもちゃ、材料（色粉など）や道具などの情報、仲介、販売などを行って欲しい。
4	スーパーバイザー対象のフォローアップ講座があると良い。プレイセンター同士の横のつながり、協会との縦のつながり（情報提供や協力し合えること）がもっと必要だと思う。
5	ブログに各プレイセンターがどんどん書き込んで交流できるように声掛けしてほしい。又は各プレイセンターが加わるメーリングリストがあると嬉しい。
6	初のシンポジウムで他のプレイセンターの様子を知ることができました。プレイセンターがもっと日本全国で理解されて、もっと増えたらいいと思います。 プレイセンター同士の連携もうまくしていけたらと思いました。
7	他のプレイセンターがどんな活動をしているのかをホームページ等、メンバーが自由に各自で見られる形にして頂きたい。

自由記述④ ― 昨今の日本は無縁社会と呼ばれていますが、プレイセンターの参加している親同士の関係性はいかがですか？（抜粋）	
1	・プレイセンターに入る人は、皆共通する（間違えてメンバーが書きました。そのままにしておきます）。　・ベッタリくっつく必要はないと思う。知らない人同士が集まる時の身の置き場所、人との関わり方などを学習していければ。　・プレイセンターに来ると、いつもの人がいるという安心感を与えていたのではないだろうか。
2	３.11以降は、より地域の必要性が重要と思うので、プレイセンターの必要性をとても感じます。プレイセンターに参加しているメンバー同志は自然と深い関わり（子どもを預ける、預かろうとする）があると思います。
3	プレイセンターの卒業者の親子は、その後も絆が続いているように思います。離れていても繋がっているのをとても感じます。また、親も子も自分の周囲と良い関係を築こうとし、自分の周囲や地域への関心が高いのでよい環境、関係を築いているように思います。親同士の関係は、とても良いと思います。

7

4	まだ日が浅い方は「プレイセンターでの関わり方は……」と肩に力が入っている人もいますが、最初からのメンバーは過ごした時間も長く、うまくいく所もうまくいかない所も受けとめ合い、弱さも出せるので支え合っている。認め合えているなぁと思います。
5	周囲とあまり関わりを持たずに生活するという動きもそろそろ底に行きついて、「やっぱり周囲とつながっていった方が良いなー」という若者が増えてきているように思うのは、プレイセンターを通して見ているからでしょうか？ 「苦手なんです」とか「緊張する」と言いながらも、つながって仲間を求める人が多いように思います。
6	親同士が同じ価値観を共有できているので、居心地は良さそう。とっても仲がいいかと言うとなかなか外までは発展しない。「遊び」も見ていることが多く、親同士であまり関わり合わない。しかし、「学びあい」では、特に自分の話を聞いてくれる仲間がいることの大切さを知り、様々なことに気付き、勇気を得ているように思う。「学びあい」で関係が深まっているように思う。
7	人との関わりを求めているメンバーが多く（子も親も）活動に積極的な方が多い。活動以外の日も子連れで行けるイベントを共有し合って遊びに行ったりしていて、深い関わりがあるメンバーが多い。
8	例えば産後の幼稚園のお迎えをチームでローテーションを組んで助け合ったり、育児に行き詰っている若葉マークのママの話を聞いたり、優しくしてあげるなど素敵です。プレイセンターピカソをしている社務所を夜にグループで借りて、夕食会を一品持ち寄りでしている人達もいます。私も参加させてもらったけど、（プレイセンター）ピカソ卒の小学生たちがチビの面倒をみて群遊びをして、パパママはその間舞台の上で話したり、飲んだりして家族ぐるみの交流をしていて楽しかった。家族が一緒に成長しているのを感じました。そこまでできない人もいるけど刺激は受けています。

②　プレイセンター参加家庭への調査結果

3．7　参加家庭の属性

回答者は「母親」が９割以上（97.2％）を占めており、「父親」は１割未満（2.8％）である。

表９　回答者の性別

	回答数	%
父親	3	2.8%
母親	105	97.2%
計	108	100.0%

回答者の年齢は、「30代」が７割近く（69.4％）を占めている。以下に、「20代」（13.9％）、「40代」（11.1％）、「40代以上」（0.9％）と続いている。

表10　回答者の年齢

	回答数	%
20代	15	13.9%
30代	75	69.4%
40代	12	11.1%
40代以上	1	0.9%
無回答	5	4.6%
計	108	100.0%

8

同居家族の構成を見ると、「子」が４割以上（43.6％）を占めている。以下には、「母親」（25.2％）、「父親」（25.0％）、「祖母」（3.1％）、「祖父」（2.6％）と続いている。また、少数（回答数１件）ではあるが、「叔父」（0.2％）、「祖々母」（0.2％）も同居している。

表11　参加世帯の家族構成

	回答数	%
父親	106	25.0%
母親	107	25.2%
子	185	43.6%
叔父	1	0.2%
祖父	11	2.6%
祖母	13	3.1%
祖々母	1	0.2%
計	424	100.0%

参加年数を見ると、「１年未満」（42.6％）が最も多く、全体の４割以上を占めている。以下に、「２年目」（22.2％）、「３年目」（17.6％）、「無回答」（7.4％）、「４年目」（5.6％）、「６年目」（2.8％）、「７年目」（0.9％）、「９年目」（0.9％）と続いている。また、「５年目」（0.0％）、「８年目」（0.0％）は０人である。

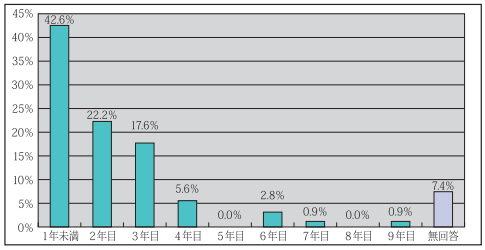

図３　プレイセンターへの参加年数

参加頻度は、「週１～２回」（38.9％）が多く、「週２～３回」（32.4％）と合わせると全体の約７割以上を占めている。以下は、「週１回以下」（16.7％）、「週３～４回」（7.4％）、「週４回以上」（1.9％）と続いている。

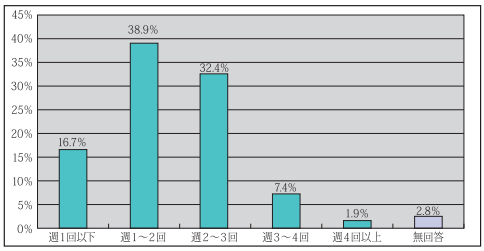

図４　プレイセンターに週何回通うか

初参加時の子どもの年齢は、「２歳～２歳６ヶ月未満」（29.6％）が最も多い。続いて「１歳～１歳６ヶ月」（25.9％）で、この２つの年齢区分で全体の半数以上を占めている。以下は、「１歳６ヶ月～２歳未満」（13.9％）、「３歳以上」（12.0％）、「７ヶ月～１歳未満」（11.1％）、「２歳６ヶ月～３歳未満」（4.6％）、「０～６ヶ月未満」（1.9％）、「無回答」（0.9％）と続いている。

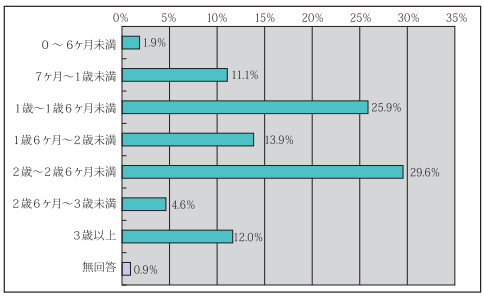

図５　初参加時の子どもの年齢

何番目の子どもと通っているのかについては、「１番目」（78.7％）が最も多く、全体の８割近くを占める。続いて「２番目」（13.9％）、「３番目」（3.7％）となる。

表12　第何子と来ているのか

	回答数	%
1番目	85	78.7%
2番目	15	13.9%
3番目	4	3.7%
無回答	4	3.7%
計	108	100.0%

３．８　他に通っている幼児教育施設・子育て機関について

他に通っている幼児教育、子育て機関については、「幼稚園」（44.4％）が最も多い。続いて「子育て支援センター・つどいの広場」（25.9％）、「育児サークル」（17.5％）、「保育所（託児所・一時保育を含む）」（13.9％）、「その他」（8.3％）となる。また、「保育ママ（家庭福祉員）」、「ファミリー・サポート・センター」、「ベビーシッター（有償）」は０人である。

表13　他に通う施設

	回答数	%
1　保育所（託児所・一時保育を含む）	15	13.9%
2　幼稚園	48	44.4%
3　保育ママ（家庭福祉員）	0	0.0%
4　ファミリー・サポート・センター	0	0.0%
5　育児サークル	19	17.6%
6　ベビーシッター（有償）	0	0.0%
7　子育て支援センター・つどいの広場	28	25.9%
8　その他	9	8.3%
計	119	

※ %は、集計件数（108件）にて計算

３．９　プレイセンターに通うきっかけ

プレイセンターを知るきっかけは、「プレイセンターに通っている友人、知人から聞いて」（33.3％）が最も多い。続いて「公共機関において」（19.4％）、「インターネットを通じて」（12.0％）、「実際のプレイセンター活動を見かけて」（10.2％）、「行政職員からの勧め」（10.2％）、「その他」（9.3％）、「他の活動期間を通じて」（7.4％）、「プレイセンターからの勧誘」（5.6％）、「プレイセンターに通っていない友人、知人から聞いて」（3.7％）、「新聞や雑誌」（2.8％）、「電話帳や電話番号が記載されている情報誌などから」（0.9％）となる。

表14　プレイセンターに通うきっかけ

	回答数	%
1　プレイセンターに通っている友人、知人から聞いて	36	33.3%
2　実際のプレイセンター活動を見かけて	11	10.2%
3　プレイセンターからの勧誘	6	5.6%
4　行政職員からの勧め（市町村、保健所、子育て支援センター、保育士などから）	11	10.2%
5　電話帳や電話番号が記載されている情報誌などから	1	0.9%
6　プレイセンターに通っていない友人、知人から聞いて	4	3.7%
7　公共機関において（リーフレットや掲示）	21	19.4%
8　新聞や雑誌	3	2.8%
9　他の活動機関を通じて	8	7.4%
10　インターネットを通じて	13	12.0%
11　その他	10	9.3%
計	124	

※ %は、集計件数（108件）にて計算

3.10　プレイセンター参加への理由

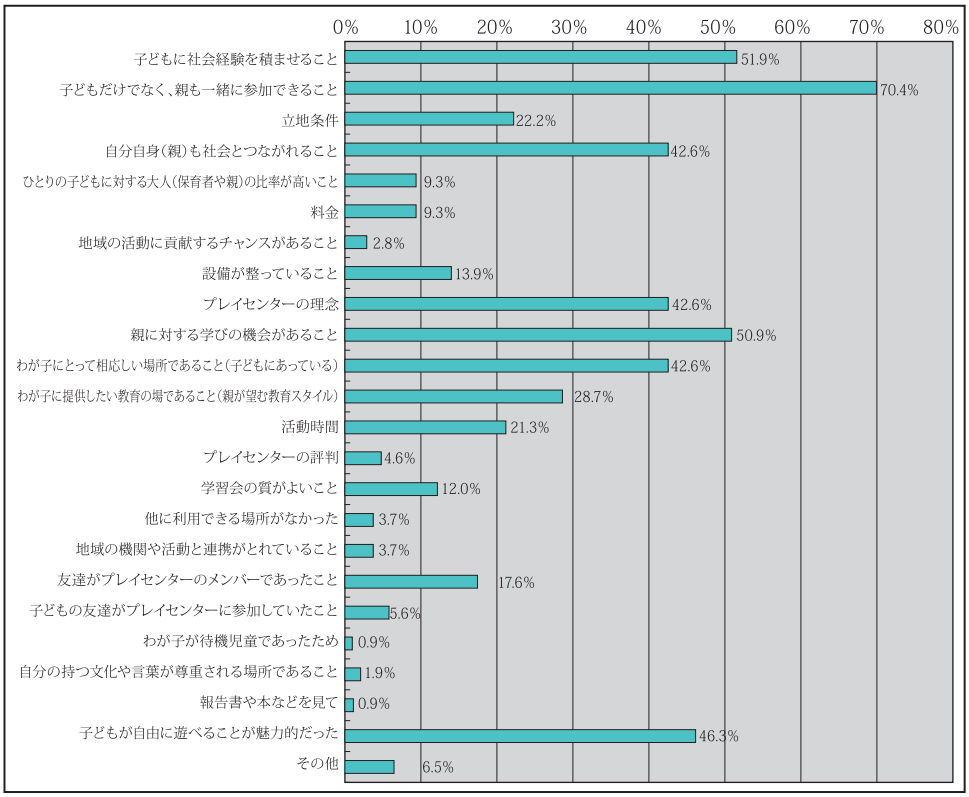

図6　プレイセンター参加で重要視したこと

プレイセンターに参加を決める際に最も重要視をした事は、「子どもだけでなく、親も一緒に参加できること」（70.4％）が最も多い。以下に、「子どもに社会経験を積ませること」（51.9％）、「親に対する学びの機会があること」（50.9％）、「子どもが自由に遊べることが魅力的だった」（46.3％）、「自分自身（親）も社会とつながれること」（42.6％）、「プレイセンターの理念」（42.6％）、「わが子にとって相応しい場所であること（子どもにあっている）」（42.6％）、「わが子に提供したい教育の場であること（親が望む教育スタイル）」（28.7％）、「立地条件」（22.2％）、「活動時間」（21.3％）、「友達がプレイセンターのメンバーであったこと」（17.6％）、「設備が整っていること」（13.9％）、「学習会の質がよいこと」（12.0％）、「ひとりの子どもに対する大人（保育者や親）の比率が高いこと」（9.3％）、「料金」（9.3％）、「その他」（6.5％）、「子どもの友達がプレイセンターに参加していたこと」（5.6％）、と続いている。また、少数（回答数5件以下）の記述では、「プレイセンターの評判」（4.6％）、「他に利用できる場所がなかった」（3.7％）、「地域の機関や活動と連携がとれていること」（3.7％）、「地域の活動に貢献するチャンスがあること」（2.8％）、「自分の持つ文化や言葉が尊重される場所であること」（1.9％）、「わが子が待機児童であったため」（0.9％）、「報告書や本などを見て」（0.9％）が続いている。

3.11　プレイセンターにおける役割分担

プレイセンターにおける役割は、「活動時の準備と後かたづけ」（76.9％）が最も多い。続いて「役員（代表、会計など役付き）」（28.7％）、「プレイセンターの清掃」（24.1％）、「活動のサポーターまたは、教育者のひとり」（21.3％）、「その他」（10.2％）、「おたよりを作る・書類をまとめる」（9.3％）、「日本プレイセンター協会認定スーパーバイザー」（4.6％）、「備品管理」（2.8％）、「学習会の司会や講師」（2.8％）、「活動資金の調達」（1.9％）、「有償ボランティア（イベント・学習会時の託児担当など）」（0.9％）となる。

表15　プレイセンターでの役割

	回答数	%
1　活動時の準備と後かたづけ	83	76.9％
2　活動のサポーターまたは、教育者のひとり	23	21.3％
3　プレイセンターの清掃	26	24.1％
4　役員（代表、会計など役付き）	31	28.7％
5　活動資金の調達	2	1.9％
6　おたよりを作る・書類をまとめる	10	9.3％
7　日本プレイセンター協会認定スーパーバイザー	5	4.6％
8　備品管理	3	2.8％
9　学習会の司会や講師	3	2.8％
10　有償ボランティア（イベント・学習会時の託児担当など）	1	0.9％
11　その他	11	10.2％
計	198	

※ %は、集計件数（108件）にて計算

3.12　プレイセンターへの参加を通じて感じること

日々、子どもとプレイセンターに参加していて感じる事は、「自分より子育て経験のある先輩ママからいろいろなことが学べていると思う」（69.4％）と、「他の人たちと助け合って協議することが楽しいと思う」（65.7％）が共に6割以上である。以下は、「子どものニーズに応えられていると思う」（49.1％）、「子どもの学びを手助けできていると思う」（49.1％）、「新しいことにチャレンジしたり、やり終えたときの達成感を味わっている」（23.1％）、「自分自身の能力が発揮できていると思う」（8.3％）、「他の親たちに対して貢献ができていると思う」（8.3％）、「リーダーシップの役割を担っていると思う」（6.5％）、「その他」（5.6％）と続いている。

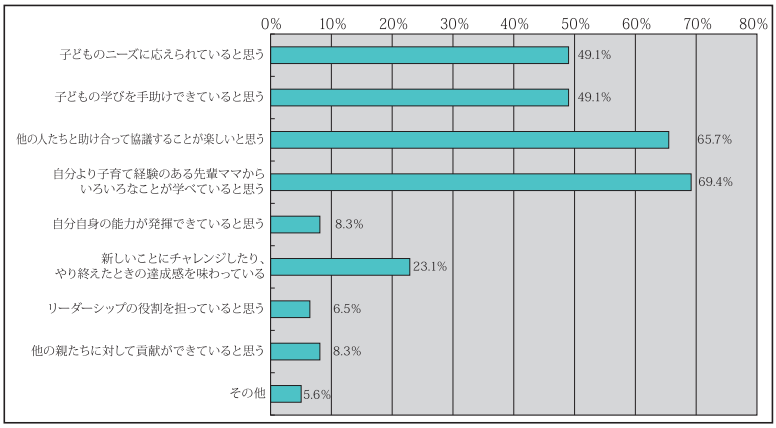

図7　プレイセンターへの参加を通じて感じること

3.13　プレイセンターの参加効果

「自分自身や自分の能力に自信がついたか」については、「わからない該当しない」（49.1％）が最も多い。以下に、「思う」（39.8％）、「思わない」（5.6％）、「強く思う」（3.7％）、「無回答」（1.9％）と続いている。また、「全く思わない」（0.0％）は０人である。

表16　自分自身や自分の能力に自信がついた

	回答数	%
a.強く思う	4	3.7％
b.思う	43	39.8％
c.わからない該当しない	53	49.1％
d.思わない	6	5.6％
e.全く思わない	0	0.0％
無回答	2	1.9％
計	108	100.0％

「他の親たちと関わりが深まった」については、「思う」（62.0％）が最も多い。以下に、「強く思う」（27.8％）、「わからない該当しない」（9.3％）、「無回答」（0.9％）と続いている。また、「思わない」（0.0％）、「全く思わない」（0.0％）は０人である。

表17　他の親たちと関わりが深まった

	回答数	%
a.強く思う	30	27.8％
b.思う	67	62.0％
c.わからない該当しない	10	9.3％
d.思わない	0	0.0％
e.全く思わない	0	0.0％
無回答	1	0.9％
計	108	100.0％

「家族とよい関係が築けるようになった」については、「思う」（53.7％）が最も多い。以下に、「わからない該当しない」（28.7％）、「強く思う」（12.0％）、「思わない」（3.7％）、「全く思わない」（0.9％）、「無回答」（0.9％）と続いている。

表18　家族とよい関係が築けるようになった

	回答数	%
a.強く思う	13	12.0％
b.思う	58	53.7％
c.わからない該当しない	31	28.7％
d.思わない	4	3.7％
e.全く思わない	1	0.9％
無回答	1	0.9％
計	108	100.0％

「地域に対する知識が増えた」については、「思う」（59.3％）が最も多い。以下に、「わからない該当しない」（21.3％）、「強く思う」（13.9％）、「思わない」（3.7％）、「無回答」（1.9％）、「全く思わない」（0.0％）は０人である。

表19　地域に対する知識が増えた

	回答数	%
a.強く思う	15	13.9％
b.思う	64	59.3％
c.わからない該当しない	23	21.3％
d.思わない	4	3.7％
e.全く思わない	0	0.0％
無回答	2	1.9％
計	108	100.0％

「自分自身が子どもに対する学びの資源であることがわかった。また、子どもに提供できる資源が増えた」については、「思う」（62.0％）が最も多い。以下に、「わからない該当しない」（18.5％）、「強く思う」（16.7％）、「思わない」（1.9％）、「無回答」（0.9％）と続いている。また、「全く思わない」（0.0％）は０人である。

表20　自分自身が子どもに対する学びの資源であることがわかった また、子どもに提供できる資源が増えた

	回答数	%
a.強く思う	18	16.7%
b.思う	67	62.0%
c.わからない該当しない	20	18.5%
d.思わない	2	1.9%
e.全く思わない	0	0.0%
無回答	1	0.9%
計	108	100.0%

「子どもの発達や学びが以前よりもっとわかるようになった」については、「思う」（62.0％）が最も多い。以下に、「強く思う」（20.4％）、「わからない該当しない」（14.8％）、「無回答」（2.8％）と続いている。また、「思わない」（0.0％）、「全く思わない」（0.0％）は０人である。

表21　子どもの発達や学びが以前よりもっとわかるようになった

	回答数	%
a.強く思う	22	20.4%
b.思う	67	62.0%
c.わからない該当しない	16	14.8%
d.思わない	0	0.0%
e.全く思わない	0	0.0%
無回答	3	2.8%
計	108	100.0%

「子どもは、受け身でなく、能動的に自ら学ぶ存在であることがわかった」については、「思う」（57.4％）が最も多い。以下に、「強く思う」（32.4％）、「わからない該当しない」（7.4％）、「無回答」（1.9％）、「思わない」（0.9％）と続いている。また、「全く思わない」（0.0％）は０人である。

表22　子どもは、受け身でなく、能動的に自ら学ぶ存在であることがわかった

	回答数	%
a.強く思う	35	32.4%
b.思う	62	57.4%
c.わからない該当しない	8	7.4%
d.思わない	1	0.9%
e.全く思わない	0	0.0%
無回答	2	1.9%
計	108	100.0%

「自分自身がクリエイティブな人間であることに気付いた」については、「わからない該当しない」（63.0％）が最も多い。以下に、「思う」（15.7％）、「思わない」（15.7％）、「全く思わない」（2.8％）、「強く思う」（1.9％）、「無回答」（0.9％）と続いている。

表23　自分自身がクリエイティブな人間であることに気付いた

	回答数	%
a.強く思う	2	1.9%
b.思う	17	15.7%
c.わからない該当しない	68	63.0%
d.思わない	17	15.7%
e.全く思わない	3	2.8%
無回答	1	0.9%
計	108	100.0%

「子育ての仕方が以前よりわかるようになった」については、「思う」（71.3％）が最も多い。以下に、「わからない該当しない」（19.4％）、「強く思う」（5.6％）、「無回答」（2.8％）、「思わない」（0.9％）と続いている。また、「全く思わない」（0.0％）は０人である。

表24　子育ての仕方が以前よりわかるようになった

	回答数	%
a.強く思う	6	5.6%
b.思う	77	71.3%
c.わからない該当しない	21	19.4%
d.思わない	1	0.9%
e.全く思わない	0	0.0%
無回答	3	2.8%
計	108	100.0%

「自分自身がプレイセンターで身に付けたスキルは、他の親たちの学びにも役立っている」については、「わからない該当しない」（50.9％）が最も多い。以下に、「思う」（37.0％）、「思わない」（6.5％）、「強く思う」（3.7％）、「全く思わない」（0.9％）、「無回答」（0.9％）と続いている。

表25　自分自身がプレイセンターで身に付けたスキルは、他の親たちの学びにも役立っている

	回答数	%
a.強く思う	4	3.7%
b.思う	40	37.0%
c.わからない該当しない	55	50.9%
d.思わない	7	6.5%
e.全く思わない	1	0.9%
無回答	1	0.9%
計	108	100.0%

「プレイセンターの係や役割を責任や自身をもって担えるようになった」については、「思う」（48.1％）が最も多い。以下に、「わからない該当しない」（34.3％）、「強く思う」（8.3％）、「思わない」（4.6％）、「無回答」（2.8％）、「全く思わない」（1.9％）と続いている。

表26　プレイセンターの係や役割を責任や自身をもって担えるようになった

	回答数	%
a.強く思う	9	8.3%
b.思う	52	48.1%
c.わからない該当しない	37	34.3%
d.思わない	5	4.6%
e.全く思わない	2	1.9%
無回答	3	2.8%
計	108	100.0%

3.14　プレイセンターにおける友好関係

「プレイセンターで友達ができた」については、「４人より多い」（63.0％）が最も多い。以下に、「１～２人」（14.8％）、「３～４人」（12.0％）、「いない」（5.6％）、「無回答」（4.6％）と続いている。

表27　プレイセンターで友達ができた

	回答数	%
いない	6	5.6%
１～２人	16	14.8%
３～４人	13	12.0%
４人より多い	68	63.0%
無回答	5	4.6%
計	108	100.0%

「プレイセンターの活動以外でも交流しているプレイセンターの友達がいる」については、「４人より多い」（38.9％）が最も多い。以下に、「１～２人」（28.7％）、「いない」（14.8％）、「３～４人」（10.2％）、「無回答」（7.4％）と続いている。

表28　プレイセンターの活動以外でも交流しているプレイセンターの友達がいる

	回答数	%
いない	16	14.8%
１～２人	31	28.7%
３～４人	11	10.2%
４人より多い	42	38.9%
無回答	8	7.4%
計	108	100.0%

プレイセンターの親たちと会う場所で最も多いのは、「プレイセンター関連の活動やイベント（プレイセンターの活動一環）」（73.1％）で７割以上を占める。以下は、「学習会やまなびあい」（38.9％）、「プレイセンターのセッション（通常活動）のみ」（29.6％）、「休日やレジャー活動」（22.2％）、「一部のプレイセンターメンバーが参加する地域イベント（任意）」（22.2％）、「地域のお祭りやイベント」（19.4％）、「その他」（12.0％）、「きょうだいの学校行事」（11.1％）、「地域のスポーツ活動」（0.9％）と続いている。

表29　プレイセンターの参加者と交流する場

	回答数	%
1　プレイセンター関連の活動やイベント（プレイセンターの活動一環）	79	73.1%
2　休日やレジャー活動	24	22.2%
3　一部のプレイセンターメンバーが参加する地域イベント（任意）	24	22.2%
4　プレイセンターのセッション（通常活動）のみ	32	29.6%
5　きょうだいの学校行事	12	11.1%
6　地域のお祭りやイベント	21	19.4%
7　地域のスポーツ活動	1	0.9%
8　学習会やまなびあい	42	38.9%
9　その他	13	12.0%
計	248	

※ %は、集計件数（108件）にて計算

「新しい友達関係が築けた」については、「思う」（50.9％）が最も多い。以下に、「強く思う」（36.1％）、「わからない該当しない」（5.6％）、「無回答」（5.6％）、「思わない」（1.9％）と続いている。また、「全く思わない」（0.0％）は０人である。

表30　プレイセンターで新しい友好関係が築けた

	回答数	%
a.強く思う	39	36.1%
b.思う	55	50.9%
c.わからない該当しない	6	5.6%
d.思わない	2	1.9%
e.全く思わない	0	0.0%
無回答	6	5.6%
計	108	100.0%

「プレイセンターで出会った親たちとの交流は楽しい」については、「思う」（50.9％）が最も多い。以下に、「強く思う」（42.6％）、「無回答」（4.6％）、「わからない該当しない」（1.9％）と続いている。また、「思わない」（0.0％）、「全く思わない」（0.0％）は０人である。

表31　プレイセンターで出会った親たちとの交流は楽しい

	回答数	%
a.強く思う	46	42.6%
b.思う	55	50.9%
c.わからない該当しない	2	1.9%
d.思わない	0	0.0%
e.全く思わない	0	0.0%
無回答	5	4.6%
計	108	100.0%

「自分が価値ある人間として受け入れられている気がする」については、「思う」(43.5％)が最も多い。以下に、「わからない該当しない」(38.9％)、「強く思う」(9.3％)、「無回答」(4.6％)、「思わない」(3.7％）と続いている。また、「全く思わない」(0.0％）は０人である。

表32　自分が価値ある人間として受け入れられている気がする

	回答数	%
a.強く思う	10	9.3%
b.思う	47	43.5%
c.わからない該当しない	42	38.9%
d.思わない	4	3.7%
e.全く思わない	0	0.0%
無回答	5	4.6%
計	108	100.0%

「簡単にプレイセンターの仲間たちと打ち解けることができた」については、「思う」(57.4％）が最も多い。以下に、「わからない該当しない」(17.6％)、「強く思う」(13.0％)、「思わない」(7.4％)、「無回答」(4.6％）と続いている。また、「全く思わない」(0.0％）は０人である。

表33　簡単にプレイセンターの仲間たちと打ち解けることができた

	回答数	%
a.強く思う	14	13.0%
b.思う	62	57.4%
c.わからない該当しない	19	17.6%
d.思わない	8	7.4%
e.全く思わない	0	0.0%
無回答	5	4.6%
計	108	100.0%

「仲間との関わりを通じて、自分自身のスキルや知識に価値が置けるようになった」については、「思う」(44.4％）が最も多い。以下に、「わからない該当しない」(39.8％)、「強く思う」(7.4％)、「無回答」(4.6％)、「思わない」(3.7％）と続いている。また、「全く思わない」(0.0％）は０人である。

表34　仲間との関わりを通じて、自分自身のスキルや知識に価値が置けるようになった

	回答数	%
a.強く思う	8	7.4%
b.思う	48	44.4%
c.わからない該当しない	43	39.8%
d.思わない	4	3.7%
e.全く思わない	0	0.0%
無回答	5	4.6%
計	108	100.0%

「プレイセンター外の趣味や話題を共有できている」については、「思う」(63.9％）が最も多い。以下に、「わからない該当しない」(15.7％)、「強く思う」(13.0％)、「無回答」(5.6％)、「思わない」(0.9％)、「全く思わない」(0.9％）と続いている。

表35　プレイセンター外の趣味や話題を共有できている

	回答数	%
a.強く思う	14	13.0%
b.思う	69	63.9%
c.わからない該当しない	17	15.7%
d.思わない	1	0.9%
e.全く思わない	1	0.9%
無回答	6	5.6%
計	108	100.0%

「個人的、または精神的なサポートが必要な時、プレイセンターの仲間に頼ることができる」については、「思う」（53.7％）が最も多い。以下に、「強く思う」（20.4％）、「わからない該当しない」（17.6％）、「無回答」（5.6％）、「思わない」（2.8％）と続いている。また、「全く思わない」（0.0％）は０人である。

表36　個人的、または精神的なサポートが必要な時、プレイセンターの仲間に頼ることができる

	回答数	%
a.強く思う	22	20.4％
b.思う	58	53.7％
c.わからない該当しない	19	17.6％
d.思わない	3	2.8％
e.全く思わない	0	0.0％
無回答	6	5.6％
計	108	100.0％

自由記述①　―日本プレイセンター協会への要望があればお書きください。（抜粋）	
1	・札幌にも作ってほしい。　・恵庭市内に何ヶ所か活動できる場所を作ってほしい。
2	６/11にあったシンポジウムで「みしまプレイセンター」の現在の活動状態を再確認できる事が出来て良かったと思ったのですが、日本プレイセンター協会からの働きかけでもっと活動場所や資金の面での援助が必須だという思いが強く残りました！
3	プレイセンターの社会的な認知度がもっと上がるといいと思います。
4	プレイセンター自体について知らない人がまだまだいると思います。プレイセンターの周知活動を宜しくお願いします。
5	学びあいの伝承も大切にしながら、地域の伝承も伝える場になるようにしたい。
6	もっと広めたいなと思います。プレイセンターでプレイセンターピカソの様な活動日が多い場所があると良いと思います。
7	もっと全国各地に広がればいいのですが……。転勤してもまた続けたいなと思いますので。
8	各地のプレイセンターの様子などが分かる会報誌のような物があるといいな。
9	拠点が数多くあれば、沢山の親子が充実した楽しい時間、空間を味わえると思います。
10	私は子育てが楽しくありませんでした。孤独で苦痛そのものでした。なので「子育てが楽しくなる」という言葉には少し過敏でした。なぜなら楽しくない子育てをしている事は、それだけで落ち込む要因になったからです。プレイセンターを紹介、説明する時に“子育てが楽しくなる”という抽象的な言葉は使わないでほしいなと思いました。
11	親と子が一緒に学ぶというコンセプトに共感できました。
12	全国のプレイセンターの現状を改善する手助けや助言をお願いします。情報交換をしやすい場の提供を望みます。
13	地域の行政がやっている子育てひろばにも行きましたが、プレイセンターの方がより深く付き合える友人ができる気がしました。グループで固まったりしない事や学びの場があるのが良いと思います。知らない人も大勢いるので、プレイセンターの活動をもっとＰＲしたらいいのにと思います。私は出会えて良かったですし、友人にもすすめています。

18

14	地方での日本プレイセンター協会主催のイベントがあれば参加したいです。
15	遊びの提案（具体的な遊びの仕方）などをホームページに載せてほしい。 会員用の非公開サイトとしてでもいいので。
16	理念を共有できる様な工夫がほしいです。もう少し情報発信してほしいです（プレイセンターを知らない人や違う世代へ）。

自由記述②　―その他、何かございましたら自由にお書きください。（抜粋）	
1	シンポジウムに参加して色々と勉強になりました。いろんなプレイセンターの形があることを知り、協力し合えたらいいなと思いました。今後ともよろしくお願いします。
2	プレイセンターでたくさんの友達が出来て、子育てのストレスがなくなりました。
3	プレイセンターを通じて子どもだけでなく自分（親）自身も地域に密着し、今までより充実して子育てをしていると思う。同じ世代の子育て仲間が得られて本当に良かった。子どもにとっても年上の子や年下の子と遊ぶ機会があり、交流の輪が広がり子どもにとって望ましい環境作りが出来ていると感じている。
4	私自身もとても悩んでいた子育てがとても楽しくイキイキして子育てできるようになったと思う。
5	新たな人間関係を築くことは、大人にとっては時に面倒であることですが、プレイセンターピカソで出会えたみんなと子育て期を共有でき、育児は楽（らく）になり、楽しくなったと感じています。
6	新規加入するメンバーを募集、選考する手間がちょっと面倒臭い。 月齢が上がるにつれ、時間が短く感じる。頻度も多くがいい（週２、３回とか）。
7	生後半年から参加させてもらっていて、最初はお部屋に入るなり泣いていた子どもでしたが、プレイセンターの経験があったからこそ、幼稚園でも小学校でも「す～っ」と仲間に打ち解けられたのだと思いました。小さい頃に泣いていた分、親の手から離れたのも早かった気がします。まだまだ夜はべったりですが、プレイセンターは親子共々大変な時期の憩の場でした。
8	先日の10周年シンポジウムに参加しました。プレイセンターの立ち上げや継続に頑張っている他のプレイセンターの皆さんを見て頭が下がる思いでした。それと同時に「育児」が社会の活動に大きく関わっている事を改めて感じ、プレイセンターで学びながら育児をしている事が嬉しくなりました。

４．結論

本研究は、2002年から始動したプレイセンターの活動をその代表者や参加する各家庭の親たちがどのように評価しているのかを分析し、検討することを目的とした。

主な結果は、以下のとおりであった。

①プレイセンターの設立年数は、４年以上と３年～４年未満がともに30％となっており、設立から３年以上経つプレイセンターの割合は全体の６割を占めた。また、登録家庭数は、

11～20世帯（60％）が一番多かった。ニュージーランドのプレイセンターでは、子どもの教育の質の確保といった観点から登録家庭の上限を25組までとするところが多く、10～19世帯（31％）、20～30世帯（37.5％）という結果であった。日本の方がやや少ないものの、同じような登録世帯数となっている。

②開催場所は、公民館や市民館、児童館、子育て支援センター、市民センター、公園など公設の場所を使用するセンターがほとんどであった。そのため、開催日数は、週１～２回を限度とするセンターが多かった。代表者からは、「外遊びができない」「公民館利用だと開催できる回数に制限がある」「玩具の保管・運搬などが負担となる」「開催回数が少ないと親同士の関係が密になれない」という悩みが挙げられた。他方、参加する親たちからも「活動場所や資金面での援助が欲しい」「活動日が多く取れる場所があるとよい」「日本各地に広がって欲しい」という意見が多く、プレイセンター独自の場所の確保と開催日を増やすことが代表者や参加者から求められていることが明らかとなった。

③活動を支える責任者であるスーパーバイザーの数は、「一人である」と回答するプレイセンターが40％にも上った。ニュージーランドのプレイセンターは政府認可園となるため、厳密な有資格者の確保（上級の資格を持つ親と初級・中級の資格を持つ親の組み合わせが決まっている）が必要となってくる。しかしながら、日本のプレイセンターの場合は、その多くが任意団体となっている。そのため、日本プレイセンター協会では、「プレイセンター」の名称を掲げて活動を行う団体に対しては、必ずセンターに一人、日本プレイセンター協会認定のスーパーバイザーを置くことと規定している。[6)] その結果、当調査においても、スーパーバイザーの数を最低基準となる一人配置に留めたプレイセンターが多くみられたのかもしれない。今後は、地域の子育て支援従事者や参加する親たちにも受講しやすいようなスーパーバイザー養成講座にしていくことが日本プレイセンター協会に課せられた課題であることが明示された。

④参加している子どもの年齢は、５歳児が最も少なく０人が88.9％、次いで４歳児が０人だったプレイセンターは、55.6％であった。また、０歳児の割合も相対的に低く、２人のセンターが33.3％あった。他方、一番多い年齢は２歳児であり、５人以上いるプレイセンターで44.4％、１歳児と３歳児は、それぞれ33.3％いた。この数値は、ニュージーランドのプレイセンターが就学前の幼児教育機関として認知されている一方で、日本のプレイセンターが幼稚園への入園までの時期を過ごす０歳～３歳の未就園児とその親の居場所として利用されていることを示している。

⑤当調査回答者の内、97.2％が母親であり、30代が約７割いた。また、家族形態は、父親と母親、子どもからなる核家族世帯がほとんどであった。初めてプレイセンターに通った時の子どもの年齢は、「２歳～２歳６ヶ月」（29.6％）、「１歳～１歳６ヶ月」（25.9％）となっており、新生児や乳児よりも活動が活発となる２歳前後からプレイセンターを始める者が多かった。また、当該児童のうち、第１子の割合は、78.7％と多く、「知人や友人からの紹介（33.3％）」が入会へのきっかけとなっていた。

⑥プレイセンターに対する期待は、「子どもと親が一緒に参加できる（70.4％）」「子ども

に社会経験を積ませる（51.9％）」「親に対する学びの機会がある（50.9％）」ことであった。また、参加後の成果は、「先輩ママからの学び（69.4％）」「他の親たちとの助け合いや協議が楽しい（65.7％）」「子どものニーズに応えられている」「子どもの学びの手助けができている」が共に49.1％とニュージーランドの調査と同様にして高かった。しかし、リーダーシップの発揮や他者への貢献についての項目は、日本の方が圧倒的に低い結果となった。

⑦プレイセンターを通じて獲得したスキルや知識については、「子どもの能動的側面に対する気付き」「他の親たちと関わりを持つ力」「子どもの発達や学びに対する知識獲得」についての項目が非常に高く、すべての項目に該当すると答えた親が８割を超えた。逆に低かった項目は、「自分自身の創造性の育成」「他の親への学びに対する自身の貢献」「係や役割を責任と自信を持って担うこと」であった。

⑧友人関係については、プレイセンターの活動を通じて４人以上の友人ができた者が６割を超えており、プレイセンター外においてもプレイセンターの友人たちと交流を行っていることが示された。また、93.5％の親が「プレイセンターで出会った親との交流が楽しい」と答えた。加えて、「個人的・精神的なサポートが必要となった際、プレイセンターの親に頼ることができる」と回答した親は74.1％にまで上った。

これまでの結果から、最終的な結論を示すことにしたい。プレイセンターの代表者や参加者たちは、「家族が一緒に成長する」「肩から力が抜け、子どもの気持ちが尊重できる」「学習会を通じて関係性が深まっている」「地域に密着することで子育てが充実する」「仲間が増え、子育てのストレスがなくなった」などの事項がプレイセンター活動から得られた成果であると評価していた。ところが、「活動場所の確保」「開催日数の少なさ」「プレイセンター間の連携不足」「プレイセンターの理念に対する参加者の無理解」「親たちのエンパワーメントを引き出すことの難しさ」などがプレイセンター普及への足かせとなっていることがわかった。さらに、ある回答者からは、「専業主婦を対象とした支援策は、国策との間にギャップがあり、『待機児童ゼロ』と『子育てする権利』との間にある河（ママ）は深い。ワークライフバランスを訴え、０～３歳の『居場所』としてプレイセンターをアピールすべき」との指摘があり、プレイセンターの広報活動に対する課題についても触れられている。

今後は、以上の課題に対し、日本プレイセンター協会がけん引役を担いながら、各地のプレイセンターとともに取り組んでゆくことが求められる。親が子育ての主体となり、子育てをめぐる諸活動やその運営を支え、子どもとともに成長してゆくプレイセンター。このような子育てのあり方がさらに日本で広がっていくならば、その成果は、現行の子育て支援事業を再考する上での貴重な資料となるであろう。

引用・参考文献

１）Powell et al. The effect of adult Playcentre participation on the creation of social capital in the local communities: A report to the New Zealand Playcentre Federation submitted by Massey University College of Education research team in collaboration with Children's Issues Centre.

Palmerston North: New Zealand Playcentre Federation, 2005.

2）佐藤純子「日本およびニュージーランドにおけるプレイセンターのソーシャルキャピタル効果に関する事例研究:参加する親たちの精神性や行動特性を手がかりにして」『海外社会保障研究』、国立社会保障・人口問題研究所、173号、2010、p.16-27.

3）佐藤純子『親こそがソーシャルキャピタル：プレイセンターにおける親の協働が紡ぎだすもの』大学教育出版、2012.

4）松田茂樹『何が育児を支えるのか：中庸なネットワークの強さ』勁草書房、2008.

5）国分寺市にあるプレイセンター小さな森は、パートⅠとⅡの二つの活動団体を持っているが、創設者が同じ者であるため、質問紙は一か所に送付することとした。

5）Powell et al. 前掲書　1）p.13-57.

6）日本のプレイセンターに関するこの規定に関しては、ニュージーランド・プレイセンター連盟も承認している。また、ニュージーランドのプレイセンター連盟と日本プレイセンター協会は、講師の派遣、交流や連携についても行っている。